

白昼夢

『Popsoda*1』——愛用のシリコンオーディオプレイヤーで毎日ループ再生をかけている、近頃お気に入りの楽曲だ。

昔から音楽は好きな方で、古くはカセットテープ全盛の時代から、CD、MDへと時代を経るに伴って、どこかへ足を運ぶ時には大抵何らかの携帯音楽プレイヤーを伴うのが、自然な俺流のライフスタイルとして定着していた。

しかし、中でもここ一年程愛用しているシリコンオーディオプレイヤーの導入は、これまでの俺のミュージックライフを名実共に一変させたといってもよい。

部屋の片隅にうず高く積み上げられたまま、うっすらと埃を被っていたCDメディアは残らず姿を消し、全てPCのHDD内のデジタルデータへと姿を変えた。

そして、いまやその気になれば、これまでに自分が収集してきたお気に入りの楽曲を、全て一台の音楽プレイヤーに入れて持ち運ぶ事だって出来るのだ。

尤も、幾ら大容量かつ携帯性を考慮して作られているとはいっても、元々振動を苦手とするHDDを持ち歩く気にはとてもなれなかったので、俺の外出時の相棒は、記憶容量ではHDDタイプに劣るフラッシュメモリータイプのプレイヤーなのだが。

ともあれ、お気に入りの曲を耳元で流しながら、俺は朝の通勤ラッシュで混雑の極みに達した駅の連絡通路を、周囲の人の流れに身を任せながら目的の私鉄線ホームへと移動していた。

この駅はJR線と私鉄線が乗り入れている、地域一帯でも乗降客の多いターミナル駅として知られていた。

かくいうこの俺も、JR線から私鉄線への乗り換えにこの駅を利用する一人なのだが、元来人混みを苦手としている俺にとっては、人通りの多いこの駅の利用はかなりのストレスとなる。

自分自身の意思とは関わりなく、次々と押し寄せる人波に始終揉まれ続けていなくてはならないからだ。

そんな時に、耳元を潤す身近な音楽の存在は、僅かなりともストレスを和らげる効果を持つ。

そうこうしているうちにも、お気に入りのトラックがフェードアウトし始め、入れ替わって都会の人波特有のザワザワした喧騒が耳元に忍び寄ってくる。

目の前を遙か前方に向かって延々と続く、いつ果てるともない無数の後頭部の群集と、耳元に押し寄せるけたたましい雑音が、凄まじい圧迫感となって四肢を束縛し、布団蒸しにでもされている様な息苦しさを感じてしまう。

——ああ、俺はつくづく混雑が嫌いなんだな。

『人混みが好きだ』という人が、この世の中に果たしてどのくらいいるのかは分からないが、少なくとも俺が代表的な『人混み嫌い派』である事だけは確かだ。

本来ならこの駅も余り利用したくはないし、更に付け加えて言うなら、誰が好き好んで

ラッシュアワーの列車に乗りたいと思うのだろうか？

これも勤務先と自宅の位置関係とか、通勤時間や費用など様々な条件を総合的に勘案した結果、仕方なくこのルートを使っているのだが、許されるのならばせめて迂回ルートを使いたいと思う。

一時期は真剣に悩んだものだが、今でも『いっそ思い切って転職しようか』という衝動に駆られそうになる時もある。

そんな些細な理由で……と思う人もいるかもしれないが、毎日否応なく苦痛の体験を強いられる時間が訪れるのだから、きっかけが些細でも積もり積もって大きな不満の塊へと成長するのだ。

とはいえ、何だかんだと愚痴を零しつつ、既にこの状態のまま三年間も我慢し続けており、半ば嫌は嫌なりにもその状況に慣れが生じ始め、半ば諦めにも支配されつつある今日この頃だった。

「早く次の曲始まってくれ……」

俺は口の中で小さく呟きつつ、意味もなく目の前の後頭部の集団に向かって視線を泳がせた。

——うわああ……。

瞬間、微かに人の悲鳴が遠くで木霊した様な気がした。

曲間のほんのつかの間の出来事で、騒音に紛れた人の話し声の聞き間違いかも知れないが、俺には苦痛に喘ぐ人の声に聞こえた。

かといって、周辺に痛みを訴えている素振りの人は見当たらなかったし、幾ら都会の人が周囲に無関心といっても、一人や二人は何らかの反応を示してもおかしくない筈だ。

しかし、まるで俺以外の誰にもその声は届いていないとでも言う様に、周囲の誰も歩行のペースを崩す事無く、何らかの異変が発生した気配さえ感じていないといった風に、淡々と目の前の人波の後を追いかけている。

——何なんだ？

俺は一瞬怪訝な表情を浮かべて眉を顰めたが、途端に耳元では次のトラックが軽快なりズムを奏で始めたから、敢えてもう一度確認する気も起きずに通り過ぎてしまったが、人波に揉まれるばかりの日常的な光景には余りに不釣り合いな悲鳴が、俺の心の奥底に鋭い棘となって引っ掛かっていた。

だからといって、その日に何か特別な事件が発生するでもなく、仕事帰りには逆方向の人波に揉まれながら連絡通路に差し掛かり、『やはりただの勘違いだったのだな……』と、変わり栄えのしない光景を見て、密かに胸を撫で下ろした。

もう日もすっかり暮れて、重苦しい疲労感に覆われて体を引き摺るように足を運ぶ会社員と思しき人や、これから夜の遊興に繰り出さんと楽しげに会話を交わしながら通り過ぎる集団、ただ脇目も振らず足早に家路を急ぐ人、辺り構わず自分達の世界に没頭している傍迷惑な恋人達……といった様々なタイプの人々の群れが織り成す連絡通路の濁流に塗れた頃には、俺も朝方の奇妙な喘ぎ声の事などすっかり忘却の彼方に押し流していた。

だが、翌日の朝、いつもの様にシリコンオーディオプレイヤーが奏でお気に入りの楽曲に耳を傾けつつ、昨日と同じ連絡通路に差し掛かったタイミングを狙っていたかの様に曲のフェードアウトが始まると、『待ってました』とばかりに例の喘ぎ声が耳元で不気味に囁いたのだ。

俺は背筋に冷たいものが走るのを感じ、思わずヘッドフォンを耳から外して周囲の喧騒に耳を凝らした。

それまで一切の淀みなく滔々と流れていた人波の真ん中で急に立ち止まったものだから、俺の直ぐ背後に続いていた人が避け切れずに衝突し、憤りと軽蔑の感情が複雑に入り混じった鋭い視線を残して立ち去った。

俺の関心は、昨日に引き続いて同じ通路のほぼ同じ地点で聞こえた奇妙な呻き声に向いていたが、『確かに聞こえた』筈の不気味な悲鳴は、又しても一瞬で消え失せてしまった。

その日は職場についてからもあの声が頭の中にこびり付いていて、一日中仕事に身が入らないまま、同僚からも俺を気遣う声とは裏腹に怪訝な表情を浮かべられてしまった。

二日連続して同じ場所で同じ様な声が聞こえたのだから、これは気のせいでも聞き間違いでも偶然でもない。

仕事帰りも同じルートを辿るのだから、その時こそきっと原因を突き止めてやる。

普段は大抵一～二時間の残業をこなして帰る所だが、今日ばかりはあの声が気になっていたので、珍しく定時間で仕事を切り上げ、意気逸って家路についたのだが、昨日同様帰る時にはあの悲鳴は聞こえなかった。

問題の場所に差し掛かると、わざわざシリコンオーディオプレイヤーの電源を一旦落として、ほんの僅かな異音も聞き漏らさぬ様に細心の注意を払って通り抜けたが、人混みの発する喧騒以外に取り立てて気になる音は聞き取れなかった。

——気のせいだ、なんて事はない筈……とすると、時間も関係しているのか？

翌日、俺は今度こそあの奇妙な声の正体を突き止めるべく、いつもより一本早目の電車で出勤する事に決めた。

予め連絡通路の端を歩く様にして、JR線の改札を抜けると直ぐにシリコンオーディオプレイヤーの電源も落とし、どんな些細な物音の変化も聞き漏らさない程神経を研ぎ澄ましつつ、問題の連絡通路に突入した。

そのまま通路の半ば近く、問題の呻き声とも叫び声とも判断のつかない音が聞こえた地点を通過しても、今日に限っては全く以前と変わりなく、よくある都会のターミナル駅での朝の通勤ラッシュの騒がしい光景が繰り広げられていた。

せっかく今日こそ具体的な証拠を掴んでやろうと意気込んで来たのに、こんな時に限ってあの声はピクリとも姿を見せようとしなない。

——まあ、そういう事態も想定して、今日は少し早めに出てきたんだから、時間一杯まで待つさ。

この二日間と同様に、いきなり何らかの異変が現れなかった事には少々落胆したが、連絡通路を通りかかる時間も関係するならば、電車一本分早く来ただけのタイムラグもあり

得るだろう……とは予測していたから、『元々そのつもりだったのだから……』と、昨日呻き声に驚いて立ち止まった地点から十メートル程私鉄駅よりの通路脇で、人波から外れて立ち止まった。

その瞬間、突如目の前が白くフラッシュバックした様な、眩い火花が飛び散った様な激しい閃光が走り、思わずその場で息を呑んで瞬きした。

かと思うと、間をおかずに光の中心から今度は漆黒の闇が視界全体に広がり、更にその中心付近遙か彼方から、巨大な物体が猛スピードで突っ込んでくるイメージが飛び込んできた。

——あれは、電車か？

行く手に立ち塞がる全ての障害物を薙ぎ払い、弾き飛ばしつつ、コントロールを失った列車が暴走し、その背後には瓦礫の山と血の海と人の叫び声だけが残されていた。

身を引き千切る余りの痛みに耐えかねたのか、そこそこで弾き飛ばされた血塗れの人影が、力なく断末魔の呻き声を漏らしている。

——ああ、そういう事だったのか。

そのイメージは擦りガラスかフィルタを被せた様な、どこか焦点の合わないぼんやりとした映像で、その衝撃的な内容の割には著しく現実感を欠いていた。

確かに自分の視界に映っているのは事実なのだが、まるで夢か幻の様に朧気で、不思議な事に映画の一シーン程の緊迫感も見られなかった。

いや……もしかしたら俺の頭の中で再現された妄想なのだろうか？

この際そんな事はどうでも良かった。

とにかく、あの呻き声は列車事故に巻き込まれた被害者が、瀕死の状態で最後の力を振り絞って救助を求める声らしい……と言う事だけは、何となく理解できた。

ふと我に返った俺は、翻って周囲を見回したが、たった今日の前で展開された衝撃的な映像を、この場に居合わせている大群衆も共に目の当たりにした……といった雰囲気は一向に感じられなかった。

例え一瞬の現実感を欠いた映像とはいえ、あの様な衝撃的シーンを見せ付けられれば、これだけの数の群衆全てが無関心ではいられないと思うし、騒ぎ立てる者の一人や二人は居てもおかしくない。

という事は、やはり俺一人が見た単なる夢幻の類いなのだろうか。

まさかとは思うが、これまでに溜まりに溜まって限界点を越えたストレスの影響で、俺の精神状態に何らかの異変をもたらし、現実にはあり得ない幻覚と幻聴を呼び起こしたとでも言うのだろうか。

いや、それなら時と場所を弁えずに容赦なく襲い掛かってくる筈だし、幻覚と幻聴の内容に一貫性がある事の説明も出来ない。

俺が見た映像と、立て続けに聞いた叫び声は、明らかに特定の事件……もっと明確に言うなら大規模列車事故の犠牲者となった人々を表していた。

周囲の反応を見る限り、俺にしか見えず、俺にしか聞こえないこれらの現象を、一体ど

う判断すればよいのだろう。

俺は私鉄線に乗り換えた列車の中でも、そして職場に着いてからも、ずっとその映像と叫び声の不思議な関連性と、そのビジョンが示す意味について考えていた。

さすがに二日間続けて普段と違って仕事に身の入らない俺の様子を気遣ってか、同僚や上司が何かというと俺に細かく気配りをしてくれた。

『この所仕事を立て込んだ影響で疲れが溜まったのだろう』と、好意的に解釈してくれた様なのだが、そんな俺の様子に付け込んで『たまには一杯飲んでストレス解消しよう！』と、強引に飲み会をセッティングする奴まで現れる始末。

俺を元気付ける為に気を遣ってくれたのか……と、当初は危うく騙されそうになったが、結論を言えば『きっかけは何でもいいから飲みに行きたい』奴がいて、俺はたまたま口実に利用されただけなのだが、皆に心配をかけたという気持ちもあったから、その場は何も言わずに付き合う事にした。

職場の同僚6人で最寄駅近くの歓楽街へ繰り出し、界限では安い割に料理が上手いと評判の居酒屋を皮切りに、近辺にある三軒の店を梯子して回った。

二件目、三件目と店を変える度に一人、また一人と脱落者が姿を消したが、最後に残された俺ともう一人の同僚は、酒に溺れたまま終電に乗り遅れてしまい、仕方なく駅前の漫画喫茶で窮屈な夜を明かす事になった。

いかにも急ごしらえといった、薄っぺらなパーテーションで区切っただけの狭苦しい個室に篋って、少しでも酔いを醒まして睡眠も取りたいと目を閉じるが、俺は生まれ付き枕が変わると眠れない体質なのだ。

結局その夜は、時折うつらうつらとしながら、薄い壁を突き破って辺りに響き渡る同僚の高斟に悩まされ、反面その逞しさを羨ましく思いつつ、呆然と夜明けまでの数時間を過ごした。

案の定アルコールは完全に抜けなくて、同僚と二人で朝方から酒臭い息を撒き散らしていたが、それでも誰にも邪魔されずに睡眠の取れた同僚の方が、俺よりはかなり気分が良さそうに見えた。

もちろん、俺も『お前の斟が煩くて眠れなかったんだ』とは、面と向かってはいえなかった。

半ば酒席を囲む口実に利用されたとはいえ、こいつも大なり小なり俺の様子を気にかけていた側面があったのも又事実なのだ。

俺は少しでもサッパリしたいと冷たい水で頬を叩き、顔面にこびり付いた皮脂と共に、胸や胃の辺りにモヤモヤする不快感を洗い流した。

上着の懐から携帯電話を取り出し、昨夜からの留守電やメール着信がない事を確認してから、漫画喫茶を後にした。

出社には少々早い時間ではあったが、俺は同僚と連れ立って職場へ赴き、今日の仕事の準備を始めている間にも、一人、又一人と出社してくる。

それから程なく、普段から俺とも比較的気が合い、昨日も一緒に飲んだ同僚の一人が現

れると、俺は眠い目を擦りながら挨拶した。

「あれ？ お前こんな所に居て、大丈夫だったのか？」

「大丈夫って、何が？」

俺の顔を見て呆気に取られた表情の同僚に、俺は訳が分からずに聞き返した。

しかし、同僚が返したのは俺が全く想定していない反応だった。

「ほら、お前いつも通勤で××駅を通ってるだろ？ 今朝、あそこで大規模な列車事故が遭ったらしいんだ。お陰で列車のダイヤも大幅に乱れてるし、結構遅刻する奴も居るんじゃないか」

「事故？ 俺、昨日は終電に乗り遅れたから、駅前の漫画喫茶に泊まってたんだ。お陰でまだ酒臭いだろう？」

「……確かに。お前も飲む時はよく飲むよな。でも、それってもしかしたらかなりラッキーかもしれないな。××駅の事故って、相当大規模らしいぞ。人が死んだんだとか……」

「人が死んだのか？」

「俺も駅員にチョロっと聞いただけだから、詳しい所は分からないけど、そろそろニュースで何かやってるかもな」

同僚に促されて、俺達は一旦休憩室に脚を運び、部屋に備え付けられているテレビの電源を入れた。

画面に灯りが点るなり、『××駅で列車が暴走！ 死傷者は数十名か？』と煽情的なテロップが飛び込んできた。

一体何がどうなっているのか詳しくは分からないが、どうやら何らかの原因で私鉄線の列車が暴走し、駅舎を突き破ってJR線の駅と繋がる連絡通路に突っ込んだらしい。

時間も朝のラッシュアワーだったから、相当な数の犠牲者が出ている模様だが、現場はまだ混乱していて、正確で詳細な情報は入手出来ていない……といった所だろう。

大きく拉げて原形を留めていない暴走列車の映像を見ながら、俺の頭の中には例の不思議な映像と呻き声が渦巻いていた。

あのビジョンは、もしかしたらこの事故の発生を告げる為の警告だったのだろうか。

こんな不思議な体験は生まれてこの方なかったし、自分自身でも未だに半信半疑である。しかし、自分の中だけで処理するには余りに荷の重い問題に思われた。

もし、あのビジョンがこの事故の発生を予め警告していたなら、俺は予め事故の発生を知っていながら見過ごした事になる。

その為に、もしかしたら数十人の犠牲者が出ているかもしれないのだ。

確かにこの列車事故は俺が起こした訳ではないが、被害が大きくなった責任の幾ばくかは俺にあると責め立てられたら、俺にはきっと弁解する言葉が思いつかないだろう。

例えば、昨日のうちにでも××駅の駅員に予め注意を促しておけば、或いは事故を防げたかもしれないし、それが無理としても被害を最小限に抑制できた可能性はある。

でも、あの時点では俺でさえあのビジョンの意味を分かりかねていたし、一般的にはまともに受け取られる筈のない妄想の類いとして片付けられるのが落ちだ。

それでも、このまま自分一人の胸に収めておくには、この問題は余りに重大かつ深刻に思われた。

妙な誤解をされかねないが、それでも誰かにこの事を打ち明けてしまった方が、多少は気分的に肩の荷が下りるのかもしれない。

「もしかしたら笑われるかもしれないけど……」

俺は、傍らでテレビ画面を食い入る様に見つめる同僚に向かって、自分がここ数日来目撃した奇妙な映像と呻き声についておずおずと話し始めた。

＊

「なるほど……」

俺の余計な心配を他所に、同僚は意外にも俺の荒唐無稽な話に、無言のまま耳を傾けてくれた。

そして、テレビ画面の中でなおも映し出されている埃塗れの瓦礫の山に視線を漂わせつつ、返すべき言葉を探していると言った風に、しばらくの間二人の隙間に張り詰めた緊張感が、どことなく耳元でチリチリと微かな音を立てている様な気がした。

俺はその場の奇妙な沈黙に耐えかねて言葉を発しようとした矢先に、同僚が機先を制して突如沈黙を突き破り、一言一言を噛み締める様にして徐に話し始めた。

「それは、もしかしたら予知夢……って奴かもしれないな」

俺は同僚の言葉に我が耳を疑ったが、ある意味それは予想出来る範囲内の回答だったといえなくもない。

ただ、これまでの俺は『予知夢』などという荒唐無稽な存在とは無縁の人生を送ってきたのだし、人格を疑われかねない妄想電波を臆面もなく垂れ流すヘンな人……とだけは疑われなくなかった。

一方の同僚は、俺をからかっているとか、面白がっている風でもなく、至って真剣な面持ちのまま慎重に言葉を継いだ。

「普通の予知夢……っていうのとは違うけど、いわゆる白昼夢なんだろうな。誰だって一度や二度はそういう夢を見た記憶がある筈だし、誰もがそういう夢を見る可能性はあると聞くな。実際にそういう夢を見る人はかなり居るらしいし」

「そうなのか？」

「……といっても、俺は実際に見た訳じゃあないし、今までそういう奴にリアルで遭った訳でもないけど。でも、そういう事に詳しい奴だっているしな」

「へえ……」

俺には少々意外だったが、そういった妄想電波の類いとは無縁に見える同僚が、実はその手の知識にかなり通じている事を知った。

——が、よくよく聞き出してみれば、それらのネタ元は大抵がWebサイト『W（ワロス）ちゃんねる』のカキコかリンク先なのだという。

『Wちゃんねる』といえば、今や日本最大の掲示板サイトとして、インターネットに余り縁のない人にも、その名前くらいは知られている有名なサイトである。

尤も、インターネットに関心のない人々にとっては、時折犯罪との関わりを指摘されるニュース報道が為される事から、ダーティなイメージが定着しているのかもしれないが。

俺も、学生時代には時折『Wちゃんねる』に出入りしていたが、専ら『PC/Game』系の板に限られていたから、同僚の言う『オカルト板』なるものの存在さえ知らなかった。

しかも、社会人になってからこれまで、日々目の前に積み上げられる仕事の山を処理する事に気を取られていたから、『Wちゃんねる』の存在すら半ば忘れていた程だ。

だからといって、同僚に面と向かって『お前、まだあんな所で遊んでいたのか?』とは言えなかった。

一般的には少々信じ難い……ともすれば下らない妄想の類いと笑い飛ばされて終わっても仕方ない俺の奇妙な体験談を、最後まで茶化さずに聞いてくれたし、こいつなりには真剣に対応してくれているのだ。

たったそれだけでも随分救われた様な気がするのに、こちらから馬鹿にする様な言葉を吐いては礼儀に悖る。

「他の奴にそんな話をしても馬鹿にされて終わりだったろうけど、相手が俺でラッキーだったな」

同僚は言った。

確かにその通りかもしれない。

「一度そういう体験をしたって事は、もう一度似たような体験をしたって不思議じゃないだろ? もし、もう一度そのビジョンを見たら俺に教えてくれよ」

「なんで?」

俺の問いかけに同僚は答えない。

その不自然な沈黙に、俺の脳裏には不吉は予感が走った。

「まさか、俺の話をネタに『Wちゃんねる』に力キコするんじゃない?」

「まあ、そう慌てずに良く聞け」

「だがな……」

同僚は俺の言葉を強引に遮ると、わざとらしく一旦間をおいてから静かに話し始めた。

「なあ、お前がそのビジョンとやらを見てからの事をよく考えてみろ。最初はお前にも訳のわからない声が一瞬間こえた様な気がしただけだ。まあ、ここまではよしとしよう。問題はその後、どう見ても大規模な列車事故としか思えないビジョンをお前は見た訳だ。しかし、それが何なのか、お前には判断がつかなかった。それが第一のポイントだ。少なくとも俺や、オカ板住人の方がその手の知識を豊富に得ている事だけは間違いない。もう一つは、例えお前自身はビジョンがいわゆる予知夢である事を理解していたとしても、それを素直に信じられる人間がこの世の中に果たしてどの位いるか……という事もある。まあ、大抵は電波扱いされて終わりだろうな。しかし、オカ板住人は違う。元々妄想電波が紛れ込む余地が多分にあるオカ板の中で、電波は電波として楽しみつつも、その中から

僅かばかりのホンモノを見つけ出そうとしている連中なんだからな。その手の話について、あ、見る目もあるし勘も働く。そして、お前の話はホンモノっぽいと思うのさ。ただ……」

「ただ？」

「俺だけでは何とも言えない部分があるから、他の住人の意見も聞きたいし、もしお前がそういった能力を持っているなら、ちゃんと検証したいからな」

「検証……なんて、何だか実験台にされているみたいで、いい気分じゃないな」

「そうは言っても、お前は今回のビジョンがこの列車事故の警告だと思っていて、予め事故の発生を知っていたにも拘らず、みすみす事故が発生するままに任せて見過ごした……って、気に病んでるんだろう？」

「まあ、な」

「だったら、一見根拠のないただの妄想電波に思えても、『そういう事もあり得る』と、まともに受け取ってくれそうな奴らが集まっているのは、オカ板くらいのもんだと思うぞ。もしお前がそういった予知夢というか、白昼夢というか、そういうビジョンを見た、どんなに必死の形相で警告しようが、周囲の連中に聞く耳がなくてはどうしようもない。もしかしたら、お前の警告をオカ板で見たお陰で、危機を事前に回避出来る人が現れるかもしれない。それがたった一人だったとしても、今回よりは警告を発した意義がある事になるとは思わないか？」

「まあ、確かに言われてみればその通りだな」

何となく騙された様な、上手く言い包められた様な、今一釈然としない気分が占められていたが、同僚の言葉にも一理ある事は認めなくてはなるまい。

「でも、俺は自分の話をネタに自分の知らない所で勝手に騒がれている……というのは嫌だし、そんな事カキコしても俺の正体がバレたらどうしてくれるんだ？」

「もちろん、俺も名無ししか捨てハンでカキコするし、お前の素性が知れない様に充分配慮するって。俺達オカ板住人に取っちゃあ、誰が予知した……って事も関心事ではあるけど、何よりも一番気になるのは予知の内容そのものだからな。その辺は何とでもするさ」

「しかしなあ……」

「まあ、取りあえず俺に全てを任せとけて。それから、又何かビジョンを見たら直ぐに教えてくれよ」

「又何か見たら……って、そんな頻繁に見る訳ないだろ？」

「そんなの分かるかって。明日辺りにでも早速別の夢見るかもしれないだろ。ほら、そろそろ仕事の時間だから行こうぜ」

同僚は強引に話を打ち切ってテレビを消すと、一足先に雑然としたオフィスへ向かっていった。

「ああ……」

俺の脳裏には、相変わらずどうにもしっくり行かない、どうにも納得の出来ないモヤモヤした感情が渦巻いていたが、今はその様な事を考えていられる時ではない。

今日もまた仕事が手につかない……という事態を晒してしまっただけは、昨日までは好意的な気遣いを見せてくれていた職場の上司や同僚達も、どの様に態度を翻すか分かったものではない。

ましてや、今日はアルコールが完全に抜け切っていない為に、体調が優れないのだから。良くも悪くも同僚の話が気になってしまい、可能ならばもう少し時間を割いてじっくりと話したいし、一人で心行くまで考えたいのだが、仕事から解放される今夜までの間はお預けだ。

必要なら、今夜にでも同僚に頼み込んで時間を取ってもらってもいい。

——こんな事をうだうだと考えている間に、俺も仕事しないと……。

後ろ髪を引かれる思いを残して休憩室を後にする俺の行く手には、俺の名を呼ぶ聞き覚えのある声が響いていた。

＊

いわゆる予知夢と言うか、白昼夢と言うか、例のビジョンを見てから一ヶ月余りが経過した。

俺の身の上には、あの時以降、取り立てて奇妙な出来事や異変が起こる訳でもなく、これまで同様の平凡だが忙しい日々が続いていた。

俺自身は、何事もなく淡々と過ぎてゆく日々の居心地の良さを、改めてこの身に噛み締めていたのだが、『Wちゃんねるオカルト板』住人の同僚にとっては少々不本意の様だ。

半月程前には、『今日は予知夢見たか？』、『例のビジョンはまだか？』と、しつこく毎日繰り返し聞かれたものだが、一ヶ月も全く音沙汰がないとさすがに『ただの偶然に過ぎなかったのか？』という結論に至ったのか、いつしか自然とその話題は鳴りを潜めていった。

俺は相変わらず毎朝××駅でJR線から私鉄線に乗り換えて通勤していた……とはいっても、一ヶ月前に発生した例の列車事故の被害は意外と大きくて、昼夜を徹した復旧工事が完了したのが一週間程前だったから、それまでの間は迂回路を使用して通勤していたのだ。

で、久々に以前の通勤ルートに戻って感じたのは、『やはり多少の混雑を我慢してでも、最短距離のこのルートが一番マシだ』という事だ。

かつては××駅での乗り継ぎ時の混雑が果てしないストレスの原因となっていたのだが、今回迂回路を使用して見て、『結局どこでも多かれ少なかれ混雑には巻き込まれるものだ』と観念した。

都心に程近く、交通便の良い地域に住むのなら、その程度の不都合は受け容れざるを得ない些細なリスクなのだろう。

どうしても混雑が我慢できないなら、思い切って田舎にでも移住するより選択肢はあるまい。

今の俺には、都会の何かと便利な生活環境を、人が少々多過ぎるから……というだけの

理由で手放すつもりはない。

それに、俺には使い慣れた愛用のシリコンオーディオプレイヤーがある。

こいつでお気に入りの音楽さえ常時耳元に流しておけば、『自分の意に反して人混みに押し流される』程度の不快感は難なくやり過ごせる。

今日の出勤のお供は、『Future-Mix*2』だ。

『Popsoda*1』も嫌いではないし、どちらかと言えば気に入っている方ではあるが、こうやって改めて両者を聞き比べてみると、少々昔の楽曲とはいえ『Future-Mix*2』の方が数段俺の好みにしっくり来る。

当然、音楽の好みは人によって千差万別なのだろうが。

いつもと同じ様に××駅で大量の人波に紛れて電車の乗車口から吐き出され、皆先を急いで押し合いへし合いしながら改札口へ突進する。

大抵改札口を出た辺りでうんざりするのだが、休む間もなく私鉄線へと流れる人の大波に飲み込まれて、後は滔々と終着点へと続く流れに身を任せるのみだ。

連絡通路は一応復旧工事を終えて、不便なく通行出来る様にはなっていたが、傍目には飽くまでも仮復旧としか見えない。

事実、連絡通路から私鉄線の駅までの全区間に渡って、この際ネガティブな事故のイメージを払拭する為の大規模な改修工事を行なう覚悟を決めたらしく、暫定復旧後も私鉄線の駅や連絡通路の外壁には工事用の足場が組まれたままになっている。

建物の作りかえで悪いイメージを覆すのも良いが、願わくば徹底した事故原因の究明と再発防止の方を最優先で実施してもらいたいものだ。

ぼんやりとそんな思いが頭の中を掠めながら、連絡通路の中程に差し掛かった時、突如目の前が真っ白くフラッシュバックした。

——来た！

別にこの時を待ち焦がれていた訳ではないが、あの日以来、いつビジョンが現れても対応出来る様に、人混みを歩く時は常に隅の方に寄って歩く様に心掛けていた。

そうすれば、いつビジョンが現れても、誰にも迷惑をかける事無く群衆の隊列から外れる事が出来るからだ。

俺は慌てて連絡通路の壁際に逃れると、これから目の前に展開されるビジョンに全神経を集中した。

いきなり激しい衝撃を受けた様に、視界が目まぐるしく動いた。

途端に目の前に何かの数字が飛び込んでくる。

921.....細かくは分からないが、とにかくその三つの数字がやけに印象に残る。

ふと頭上を見上げると、界隈で一際目立つ高層ビルから、大量のガラス片やら剥がれた壁材やらが降り注いでくる。

一体何が起こったんだ？

夢見心地の朦朧とした意識の中で、明らかに現実感が欠如していたが、それでも大変な事態が進行中である事だけは理解出来た。

遠く離れた所から眺める分には、小さなゴミ屑か塵にしか見えない落下物も、間近から見ればかなり巨大な物体なのかもしれない。

そうして想像を逞しくしながら事の推移を見守っていると、現代建築技術の粋を結集した巨大建造物は、どうやらある一つの結末に向かってじりじりと緩やかな歩みを進めている様に思えた。

きっと誰もが望まないだろうが、現状を見る限り誰もが例え僅かであれ疑ってみる悪しき可能性へと向かって。

——みんな建物から避難出来たのだろうか。

ふとそんな事が気になった矢先に、その時は訪れるべくして訪れた。

突如舞い上がるどす黒い土煙の塊に包まれた塔は、瞬く間に目まぐるしくその姿を変え、俺の視界を濛々と立ち込める濁った土煙で覆い隠して、そのビジョンは途切れた。

——まるで 9.11 の WTC そのものだ。

こちらの方が問題にならないくらい建物の規模が小ぶりだったが、それでもビジョンの訴えかけるイメージは、9.11 の直後にテレビで繰り返し流された『崩れ行く WTC』の映像そのものだった。

俺は、そのまましばらく連絡通路の壁に背を凭せ掛けたまま、映像が示す意味を図りかねつつ余韻に浸っていたのだが、ふと自分が出勤途上である事を思い出して、強引に意識を現実に戻した。

色々と細かな不平不満はあるにしても、こういう時に最も頼りになるのは、『Wちゃんねるオカルト板』住人でもある同僚だ。

この前の、他人をまな板の上のモルモット扱いする態度には、正直居た堪れない部分があったのだが、俺の話を茶化したりからかったりせずに聞いてくれたのもまた、あの同僚のみだった。

とはいえ、あのビジョンの話を打ち明けたのも、たまたま奴だけだったという理由からかもしれないが。

俺は、時間の遅れを取り戻すべく、慌てて職場への道を急いだのだが、辛うじて遅刻だけは免れたものの、朝のうちに例のビジョンについて同僚に話す時間はなかった。

「見たぞ」

書類を手に、いかにも仕事上の打ち合わせといった風を装いつつ、俺は同僚に声を掛けたが、『何が?』と、全く意識の片隅にも例のビジョンが残っていない様に思える。

「今朝、見たぞ」

周囲に余り目立たぬ様に、しかし傍らの同僚にははっきりと意図が伝わる様に、心持ち語気を強めて断言した。

「えっ? まさか……マジかよ?」

あれからかれこれ一ヶ月以上経過しているのだから、半ば諦めかけていただろう同僚の反応は予想がついていたが、それにしても余りに無関心といった淡泊な反応には、俺も少々気が抜けてしまった。

が、人間とは実に現金なもので、俺の言葉が『再び例のビジョンを見た』事を意味すると思ひ当たるなり、コロリと態度を変えてきた。

俺達は早速今夜、仕事帰りにでも近くにあるカラオケボックスへ繰り出す事に決めた。

もちろん、明け方までノンストップの12時間連続耐久カラオケ大会の開催が目的ではない。

カラオケボックスという場所は遮音性に優れている分、手近な密談の場として重宝するのだ。

更に、値段も比較的リーズナブルと来ている。

元々が大声を張り上げて歌う場所だけに、周囲の騒音も気にならなくはないが、逆にこそそと密談を行なう場所としては都合が良い。

俺達は密室に籠って、オーダーを取りに来た店員の女の子をそそくさと追い出すと、早々に本題へと切り込もうとしたのだが、『新曲の練習していいか?』と、同僚の時と場所を弁えない行動に三曲も付き合わされてしまった。

尤も、こちらの方がカラオケボックスの本来の使い道なのだから、文句を言う筋合いではないのかもしれないが、歌だって他人に披露する程の腕前ではないのだから、いい加減にして欲しい。

「すまねえな。でも、やっぱカラオケ来たら歌わないと。お前も一曲歌うか?」

——だから……。

俺は同僚の問いかけを無視して本題に突入した。

今朝の一連のビジョンについて、自分が見たままを順を追って説明するうちに、同僚の表情が俄かに固く強張っていった。

そして、俺が一通り話し終えるのを待ってから、敢えて一拍おいて同僚が口を開いた。

「なるほど、まるで9.11みたいだな。ちょうど11日を過ぎたばかりだから、テレビとかでも当時の映像を流してたし……その手の映像の見過ぎとか?」

「まさか! だったら去年だってその前だって、この時期になると必ず似た様な映像を流してたろ?」

「確かに……。それはともかく、ポイントは二つだな。その921という数字と、どこかのビルが倒壊するって所だな」

その後細かい部分について、根掘り葉掘りの質問の嵐が続いたのだが、あっという間に予定の90分が経過してしまった。

同僚は後30分延長して更に聞きたい部分があった様なのだが、俺が話すべき事は既に全て話してしまっていたし、この場ですぐにビジョンが示す意味が分からないなら、これ以上長居をしても時間の無駄遣いでしかない。

——どうせ、『Wちゃんねる』住人に聞かないと分からない……等とのたまうのだろうな。

自分の与り知らぬ所で、半公然と自分が見たビジョンについての話が交わされているのは不愉快ではあったが、それでビジョンの示す意味が分かるとしたら、我慢出来なくはな

かった。

同僚は『お前もカキコシに来れば？ 住人のみんなも喜ぶと思うけど……』というが、俺は真っ平ごめんだ。

こちらは好きであのビジョンを見ている訳ではないのだから。

不承不承ではあるが、同僚には例のビジョンについて『Wちゃんねる』にカキコする事を承認するの引き換えに、『俺の素性は絶対に漏洩しない様にする』事と、『ビジョンの示す意味が分かったら直ぐに報告する』事を約束させた。

翌日の時点では、『まだ議論の最中で具体的な見解は出ていない』という話だった。

同僚から、『お前だって、気になるなら直接オカ板に来ればいいのに』と誘われてしまったが、誰が今更 Wちゃんねるなどにいくものか。

決して『俺はもう Wちゃんねるを卒業したんだから今更いけるか！』と言った意固地な思い込みからだけではない。

俺のビジョンについてどの様な会話が交わされているのか……それを知ってしまったら二度とこれまでの様な平穏無事な日々に戻れなくなってしまうかもしれない……そんな漠然とした恐怖感に苛まれていたから、自分から進んで Wちゃんねるに足を踏み入れるのが怖かったのだ。

それに、いずれにせよ明日からの三日間は祝日を含めた連休となる。

それだけの時間があれば、幾ら雲を掴む様な荒唐無稽な夢物語がネタだと言っても、何かしらの結論は導き出せるだろう。

そんな俺の大まかな見通しにも寸分違わず、連休明けの火曜日には、同僚は色々と興味深い仮説を幾つも携えてきた。

もちろん、場所は仕事帰りのカラオケボックスだ。

今日ばかりは同僚も『まずはオケを一曲……』とは言い出さずに、無論俺もそんな気分ではなかったので、案外すんなりと本題に突入出来た。

「まず、例のビジョンについてだが、921という三桁の数字は、日付説が濃厚という見解になった。もちろん、発生時刻の9時21分を示すとか、全く別の何かを示す可能性もある。……が、そういうビジョンが見えるにはそれなりの理由がある筈で、その理由がお前に何らかの事件なり事故の発生を警告する意味があるのだとしたら……最も気になるのはその事件の発生日だろ？」

「なるほどね……」

「それから、倒壊する高層ビルについてだけど、お前の話だけでどの建物かを特定するのは無理だ。……まあ、当然だよな。実際にビジョンを見たのはお前だけなんだから。ただし、前回のビジョンと合わせて考えてみると、ちょっと面白い仮説を出してきた住人が居てさ……」

「面白い仮説って？」

「ああ、テレビの『超能力捜査官が未解決事件の謎を暴く！』とかいう番組で、ある事件に関わって行方不明になった人が身に付けていた物に触れると、その人が今どうしてい

るのかとか、どういう目にあったのかが分かる……って話があるだろう？ お前の場合、その能力に似ているって言うんだ」

「どこが？」

「物体ではないけどお前の場合は場所に感応するんじゃないか……って言うのが、そいつの仮説だ。前回のビジョンは、まさに事故の起きた現場で、事故の起きた時間に居合わせたから、事故の予感をお前が感じ取ったと考えられる。……で、あれば、今回もまたその場所で、ビルが倒壊する様な事件か事故が起こるのかもしれない」

「まさか……」

「××駅近辺で目立つ建物と言えば、ほら、高層マンション建ててたろ？ あれなら駅ビルよりも頭一つ高いし、お前の言う条件にも合致する」

「それで、なんでそのマンションが倒壊するんだ？」

「理由は、ビジョンを見たお前の方が詳しい筈だろ？ 一番あり得そうなのが巨大地震の発生で、他にも何かの事故か火事なんかの災害……これは最もあり得なさそうなんだが、爆破テロのターゲットにされた……なんて荒唐無稽な説だって完全に否定は出来ない。既に旬は過ぎたと言っても、少し前には『マンションの耐震偽装』なんて事件もあったから、その方面で元々強度の足りない建物だった……なんてオチもありそうだし、今のところは『これだ！』と言えるものはない。ただ、それが近いうちに起きる事だけは言えそうだから、あらゆる可能性を考慮してその対策を施すのが、今のお前に出来る事じゃないのか？」

確かに同僚の言う通りだ。

このビジョンが現実化するならば、その原因が何であれ大した問題ではない。

最も重要なのは、被害をどの程度最小化出来るかどうかにある。

「まあ、それはいいんだけどさ、問題はスレに出入りしてた一部の厨房や DQN が、『9・21の予言』とか言って他の板にもリンク貼りまくって、スレ自体がちょっとした祭状態になってるって所なんだ」

ああ、どこの板でもそうだが、『Wちゃんねる』の住人は直ぐに悪乗りするから、場合によっては他愛もない出来事がいつの間にか大事に発展するのだ。

「だから『Wちゃんねる』へのカキコは駄目だって言ったのに……」

とはいいつつ、最終的には俺もカキコを承諾したのだから、同僚にばかり責任を擦り付けてもどうしようもない。

一度騒ぎが広がってしまったら、自然の成り行きで事態が沈静化するのを見守るしかない。

まあ、既に起きてしまった事を今更どうにかしようと足掻いてみても、結局無駄な労力でしかないのだから。

「別にオカ板を見るな……とまでは言わない。でも、今後俺のビジョンに関するカキコは一切禁止だ。いいか？」

せめて事態を早急に沈静化するには、『新たな話題を提供しない』事、そして『住人がこのネタに飽きる様に仕向ける』事が重要だ。

それでも騒ぎが収まらなければ、我々にはもう打つ手がない。

後は、馬鹿な厨房共が調子に乗って話の出所を暴きたて、俺のプライベートをネット上に晒し上げたりしない事を、ひたすら天に祈るのみだ。

「恨むぞ……」

本気ではなかったが、その一言に毒を含ませて同僚に叩きつけた。

「でも、情報の出所がお前だって知られた訳じゃないし、9月21日が過ぎれば大人しくなるだろ」

「まあ、それはそうだが」

何も今月の21日に必ずビルが倒壊するとは限らない。

いい方向に外れてくれるのならば、それはそれで一件落着ではないか。

むしろ、この前のビジョンと同様に、変に現実化してしまった方が気が重い。

そんな俺の、様々な想定に基づく根拠のない不安は、いとも呆気なく解消された。

問題の9月21日には、結局あのビジョンの実現を思わせる事件は何も発生しなかったのだ。

同僚に『Wちゃんねる』での後日談を聞くと、案の定厨房共が荒らし回っていたらしい。

そして、オカ板に立てられていた、俺のビジョンについて検討するスレッドも、そのまま放置されてしまったのだそうだ。

結局、人騒がせなビジョンは何の結果も伴う事無く消えうせ、俺にも久々に平穏な日々が戻ってきた。

同僚はオカ板で戦犯扱いされたと怨み言を言って来たが、それなら俺だって言いたい事は幾らでもあるのだから、お互い様だ。

この機会にいい加減『Wちゃんねる』を卒業したらどうだ……と、それとなく言ってみたが、奴はまるで聞く耳を持っていない。

まあ、人それぞれなのだから、好きな様にすればいいさ。

俺はそれから再び仕事に埋没する日々を送り、一週間が瞬く間に経過した。

泥の海に埋もれた様な重苦しい体を引き摺って、そろそろとベッドから這い出してきた俺は、いきなり何かに躓いて頭からソファークッションに倒れこんだ。

自宅に居る時くらいは、横になってのんびり寛ぎたいと、元々の部屋の狭さを無視して強引に導入したのだ。

倒れ込んだ俺の視線の先には、乱雑に折りたたまれた新聞紙が、何部か重なって床に置き去りにされている。

自分でも9月21日が妙に気になって、駅の売店で何紙もの朝刊と夕刊を買い漁っては、あのビジョンに当てはまる事件が発生したかどうかを調べたのだった。

しかし、それも今や全てが単なる紙屑と化し、放置されるがままになっていた。

全部ゴミだな。

邪魔だし、後でまとめて処分しよう。

幾ら今日が休日だと言っても、いつまでも寝ていては体のリズムが狂って、明日以降に

差し支える。

取りあえず遅めのモーニングコーヒーで目を覚まそうと、足元が覚束ないままヨロヨロと立ち上がった途端に、グラッと一瞬揺れた様な気がした。

まだ寝惚けているからだろうか……頭を振って一歩踏み出した俺の足元が、今度は明らかに地面が揺れている……と確信させる激しい震動に揺り動かされた。

——大きい！

俺は反射的に両手で頭を覆ってソファーに倒れこんだ。

ちらりと視界に入った壁掛け時計の針は、9時21分を示していた様に見えた。

(了)

*1 Popsoda : <http://www.technasia.com/>

*2 Future-Mix : <http://www.technasia.com/>

HP【Blankfolder】

<http://blankfolder.huuryuu.com/>

<http://blankfolder.blog.shinobi.jp/>

Copyright(C) 2006-2007【Blankfolder】こりん, All Rights Reserved.

本ファイルの二次配布はご遠慮下さい。

本作品へのお問い合わせは上記 HP にて受け付けております。

本作品に対するご意見、ご感想は上記 Blog でもお受けしております。